

論文の要約

論文題目：『女人芸術』の人々と中国 —— 植民地的近代と女性作家の文化生産

氏名：楊 佳嘉

本学位申請論文は昭和初期（1927-1936）の女性文学における中国表象に関する文化的な研究を試みたものである。マクロとミクロの視点を往復しつつ、この時期の女性作家たちの中国表象における〈植民地的近代〉の問題をトランスカルチャーの視座で分析する。インターセクショナリティという分析のツールを導入し、彼女たちの中国を表象するテキストにおける植民地的近代の多様性と複雑性を明らかにした上で、彼女たちの文化生産の過程における〈中国〉の機能と意義を究明し、東アジアの近代性を問い直す。

近代日本文学における中国表象についての先行研究では主に男性の作家や文化人が研究の対象とされている。個別の女性作家の中国表象についての研究もあるとはいえ、時期としては日中全面戦争以降、地域としては「満洲」に集中している偏向性がある。日中全面戦争が始まるまでの女性の作家や文化人たちと中国の関わりや、彼女たちの中国表象などについては、明確にされていないものが多い。それに対して、本論文は雑誌『女人芸術』を拠点とした女性作家たちの中国表象テキストを取り上げ、彼女たちはいかに中国を語るか、〈中国〉は彼女たちの文化生産の過程においてどのような機能と意義を持ったのかについて論じる。

本申論文は二部からなる。本論に序章と、終章を付しており、全体は7章によって論を展開している。第一部では、マクロな視点で雑誌分析した上で、プロレタリア女性作家の作品をとりあげ、素材としての〈中国〉がどのように描かれたのかを分析し、その中国表象の彼女たちの文学創作における機能と意味付けを検討する。

第1章では、『女人芸術』における中国関連の記事の特徴をジャンルごとに整理した上で、『女人芸術』を拠点として中国に越境した日本の女性知識人たちの記録を分析することによって、彼女たちが描いた他者としての中国像を抽出し、彼女たちの中国へのまなざしをダイナミックに変化する中国像、植民地性の不可視化、モデルとしての女性像という点から明らかにする。

第2章では、平林たい子の「満洲」を舞台とした小説である「投げすてよ！」と「施療室にて」を取り上げ、両作品における空間の意味と機能に注目し、作品における顕在化している植民地空間と潜在化している植民地空間の関係性を明らかにすることで、1920年代の「満洲」体験の平林たい子にとっての意義を検討する。

第3章では、第2章の延長線上に、たい子の「満洲」関係のもう一つの作品である「敷設

列車」を取り上げ、作品における中国人苦力の表象を分析することで、植民地帝国「満洲」における生政治の原理を明確にし、同時代のプロレタリア文化運動における、階級闘争を絶対的な価値と見なすイデオロギーを乗り越えようとしたたい子の〈柔軟なインターナショナルリズム〉の思想を究明する。

第4章では、中本たか子の「東モス第二工場」を分析対象として、インターナショナルリズムの文脈において、無産階級の女性を啓蒙する教育小説としての、この作品で装置としての中国プロレタリアの革命運動がどのように機能したかを論じる。

第二部は、中国へ旅行した女性作家たちのトラベル・ライティング (Travel writing) についての研究である。ここでいうトラベル・ライティングとは、旅行をテーマとして書くことを意味する。取り扱うテキストには紀行文だけではなく、旅行中の見聞についての評論や、旅行をテーマとした小説も含まれている。女性作家たちのテキストにおける他者への描き方と戦略を分析した上で、他者との交流が実現できた彼女たちにとって、中国旅行にはどのような意味があるか、中国表象が彼女たちの文化実践においてどのように機能しているかを考察する。

第5章では森三千代の「病薔薇」という小説を分析する。この小説は三千代自身の1920年代の上海旅行を素材にしてフィクション化したものである。作品における男性のまなざしとの女性主人公のその差異を比較しつつ、日本人の女性主人公と中国の女性作家の関係性を分析することで、当時の上海旅行は三千代にとってどのような意味があったかを究明する。

第6章では林芙美子の1930年の中国旅行についての語りを中心に分析する。同時代の与謝野晶子や吉屋信子との比較を通して、芙美子のはじめての中国旅行で、中国における多様にわたる植民地主義とどのように向き合ったのかを分析し、当時の中国が中下層の女性作家である芙美子に与えた意義を明らかにする。

第7章では、有名作家になった芙美子の、1936年の中国旅行についての語り进行分析する。日中関係の緊張が高まる時局の中での、芙美子の「日中親善」の語りを分析することで、文化と政治についての彼女の中国に対する複雑な姿勢およびその根底にある文化侵略の思想を明らかにする。

総じていえば、この時期の女性作家たちの中国表象テキストにおける植民地的近代の問題は多様な形で表象されていたのである。プロレタリア女性作家たちは中国における帝国日本の経済侵略の問題や中国の反帝国主義と反植民地主義の革命運動に注目していた。平林たい子は労働や、再生産、植民地主義の交差性に注目し、「投げすてよ！」と「施療室にて」において、顕在化している植民地化された空間と潜在化している植民地化された空間の

造形を通して、「植民地」満洲における苦力と日本人女性労働者のサバルタンとしての共通性を示している。彼女はサバルタンたちの嘆きの声を拾い、帝国日本の植民地主義を厳しく批判している。そのみならず、「敷設列車」では、彼女は従来「語ることのできない」存在であったサバルタンたちの声を可視化し、苦力たちが列車を奪取することの描写を通して、彼らに生き延びる希望を与えている。そこには、階級闘争に絶対的な価値を認めるプロレタリア文化運動のイデオロギーを乗り越えようとする平林たい子の挑戦が見られ、階級闘争よりも人の命を守ることに重きを置く彼女の生命共同体の思想も窺える。中本たか子は、中国の革命運動に注目した。それは左翼文化運動のインターナショナリズムの産物であるといえよう。とはいえ、彼女はプロレタリア階級内部におけるジェンダーと民族の差異を認識していた。階級と民族によって他者化された中国の労働者たちのストライキは一つの装置として、階級とジェンダーによって他者化された日本女性労働者の動員に成功することを描いたことは、たか子の中国表象の特筆すべきところである。この二人のプロレタリア女性作家は、ともに階級と他の要素（民族あるいはジェンダー）の交差性による多重の抑圧のメカニズムを示し、民族的な他者としての中国人労働者とジェンダー的な他者としての女性労働者の関係性の描写に力を入れた。

中国に旅行した女性作家たちのトラベル・ライティングについての分析を通して、彼女らの関心は植民地的近代の文化事象に向けられる傾向があることを見ることができる。森三千代は、1920年代後半の上海旅行における、中国の女性作家白薇との出会いを、小説によって事後的に書き直している。彼女は、現実において性病に悩まされ性的な風評を向けられた白薇を、小説の中で革命的で自由な精神を持つ新しい人物像に書き換え、日中女性同士の連帯へと向かう関係性を示している。その描かれ方には、男性ジェンダー化した文学場で女性作家に付された性的な意味を、女性の文脈に取り戻そうとする姿勢が見られる。林芙美子は、1930年の初めての中国旅行において、ハルビンと上海でさまざまな植民地的近代の文化に遭遇した。彼女はハルビンにおいて、旧帝ロシアの消費文化を満喫し、ソビエト文化人との交流を通して知的な刺激を受けており、その経験を『女人芸術』の読者とも共有している。また上海では、女性散策者としての彼女は、極端な形で現れている植民地的近代のモダン文化である上海モダンガールを発見し、そこに羨望のまなざしを注いでいる。

以上のように、彼女たちの中国表象は同時代の『女人芸術』の女性文化人たちの中国表象の特徴と概ね一致しているといえる。しかし、『女人芸術』の廃刊後、時代の風向きが変わるとともに、女性作家たちの中国表象も変質していった。林芙美子の1936年の中国旅行についての語りはその一つの例である。その北京への旅行で芙美子は、中国人に対し友好的な文化交流の姿勢を示し「日中親善」を強調しているが、その背後には中国を植民地としてみ

なす文化侵略の思想が潜在していた。それは、戦時下の彼女の言説とも接続しているものである。

女性作家たちの書く行為に目を向けると、男性作家たちの中国表象とは違って、女性作家たちの中国表象にはジェンダーの要素が強く機能していることがわかる。女性作家という身分が彼女たちの書く行為に大きな影響をあたえているのはそうした事例の一つである。いずれの女性作家も、中国表象を作る際に男性ジェンダー化された文学、あるいは文化場に対して応答しており、それは抵抗や攪乱あるいは従属の形で現れている。また、彼女たちのテキストに女性ジェンダー化されたまなざしが存在しているのもそうである。たとえば、平林たい子と中本たか子は女性労働者への、森三千代は中国の女性作家への、林芙美子と吉屋信子は各階層の女性へのまなざしを示している。

また、階級や個人の経験の違いによって、彼女たちそれぞれにとっての〈中国〉の意味は異なっている。平林たい子にとって、中国はサバルタンを発見する場所であり、中国体験は彼女のサバルタンの女性作家としての書直しの契機でもあった。中本たか子にとっては、中国は彼女の作品における女性の身体を書き換えのための装置となる。吉屋信子にとっての中国は、ヨーロッパへの旅の中継地であり、日本の勢力が及ぶ植民地である。彼女の女性ジェンダー化された中国表象には、あきらかな帝国のまなざしが包含されていた。それに対して、中下層出身の林芙美子は、当初は中国を新しいモダン文化と女性解放の新世界と見なす視点をもっていたが、それを強くなってきた中国女性文化人に羨望や脅威を感じる複雑な感情へと転換することによって、結局日本の中国に対する文化侵略に参加してしまった。また、森三千代は、他者としての中国の女性作家を表象すると同時に、それを彼女の自己表象と連動させ、日中女性作家の間には緊張関係があったにもかかわらず、両者の連帯の可能性を示している。そこに、彼女の日本人女性作家としてのジレンマとそれを乗り越えようとする意志が読み取れる。

総じて、中国表象の分析からはこの時期の女性作家たちの文化生産の多様性と複雑性が見られ、〈中国〉は彼女たちの文化生産の過程に多様な機能をしてきたといえることができる。また、東アジアの女性の近代化の過程において中国が女性解放において先鋭性を持っていたことは、多くの女性作家の共通認識であった。彼女たちの解放された中国女性の表象には、彼女たちの羨望や脅威感、ときとして喪失感さえもが生じている。それは、東アジアの近代化の過程における、女性文化の植民地的近代の特徴といえよう。彼女たちのまなざしを通して、従来見落とされてきた日中文化交流とその複雑な関係性を一つの水脈として捉えることができるのではないか。